

# 虹の橋と地獄の人参

—その発生と伝播をめぐる考察(二)—

加藤 秀雄

はじめに

本稿は、「虹の橋と地獄の人参(一)」「世間話研究」二四号所収)の続編として、主にインターネット上で流通する「虹の橋」と呼ばれる話に着目し、その特徴を過去の話の伝承、伝播のあり方と比較しながら論じることを目指すとする。加えて、この話の伝播の背後に存在する文化的、社会的要因についても若干の考察を試みていきたい。

前稿では、山形、福島、愛媛などに伝承されていた「地獄の人参」と呼ばれる話が、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の内容と酷似していることを手掛かりとし、その伝播がいかなる経路でなされたのかを分析した。特にドストエフスキ一の『カラマゾフの兄弟』に登場する「一本の葱」というエピソードや、鈴木大拙が一八九八年に翻訳を行った『因果の小車』(P・ケラス著)などが、「地獄の人参」

の原典である可能性を指摘したが、この事例で重要だったのは、海外の小説や民話や書物というメディアを介して生活世界に導入することにより、それが現地で昔話や世間話と化す可能性が示唆されている点であろう。

「虹の橋」もまた日本国内で独自に発生したものではなく、アメリカ発祥の話がインターネットによって伝播したことにより定着したものである。海外のテキストに起源を持つという点では、「地獄の人参」と類似した性格を持つが、その伝播のあり方には大きな違いがある。本稿で見たいのは、その違いであり、両者の差異は、現代における話の流通の特徴の一端を明らかにするものとなるだろう。

## 1. 文字を介した話の伝播

筆者は、文字を介した話の伝播について、三つの画期が存在したと考える。第一の画期は文字の登場である。口伝

えと人の移動によってなされてきた話の伝承と伝播は、それが文字という形をとって記録されることにより、時間的、空間的な移動に伴う変化への強度を獲得するに至った。このことが世界規模の話の類似現象に与えた影響は極めて大きかったと言えよう。

第二の画期は印刷技術の普及である。柳田国男が『口承文芸史考』で述べているように、印刷は口承と書承(手承眼承の本格文芸)の間にあつた関係に「恐ろしい程の大きな変革」をもたらした(柳田 一九九九 三八七)。では、具体的にどのような「変革」があつたのか。柳田の言によれば、それは「定本の権威の専横」であり「口碑の零落」である(前掲書 三八七、三九四)。「活版印刷の性格が拡張される時、それぞれの言語の統制と固定化が発生する」と論じたマクルーハンの言葉などが想起されよう(マクルーハン 一九八六三四九)。現在、印刷や電子化といった複製技術を経ずに拡散する話を想定することは、ほとんど不可能である。

そして第三の画期は、あらゆる文字表現の集積される場として確立しつつある電脳世界の登場である。すでに私たちの言葉の受容と表出は、この電脳世界とリンクしながらなされるところが大である。最近ではネットロアや電承といった概念を分析視角とし、この状況にアプローチする試みも民俗学を中心に徐々に現れ始めている(伊藤 二〇一六)。

「地獄の人参」は、このうち第二の画期と関わるものである。海を越えてもたらされた印刷物は、まずそれを読んだ人間の手によって翻訳、出版され、のちに巷間の人々の口の端に上るまでになった。そしてそれは再び文字として記録されていったのである。このように印刷技術の登場以降における話の伝播は、書物という存在を抜きにして語ることとは出来ない。しかし、まだこの時代には特定の語り手や語りの場(僧侶や寺、教師や学校など)が現実空間に存在しており、その果たす役割も大きかった。

これに対し、第三の画期を経たあとの電脳世界を介した話の伝播は、現実空間における語り手や語りの場を基本的に必要とせず、明らかに前世紀のそれとは異なる様相を呈している。本稿では「虹の橋」を具体的事例として取り上げ、これについて論じるが、これはサイバネティックスの時代における民俗学のありかたを模索する一つの試金石である。

## 2. 海を越えた話

### (1) 口承文芸の時空間

『今昔物語』や『宇治拾遺物語』などの例を引くまでもなく、口承文芸と書物の間には一定の相関関係があり、口承→書物、書物→口承という現象は、文字の登場と時を同じくして発生した。そして遙かな時間と空間を経て、それ

が伝播し、昔話や伝説として定着したと考えられる事例も少なからず存在するのである。

顕著な例としては大分県を始めとし、全国各地に伝承されてきた百合若大臣の話や中世の説教節、近世の浄瑠璃を介して百合若を主人公とする伝説は各地に伝播していった。そして、近代に入り西洋の古典が翻訳されるに及んで、これが古代ギリシャの叙事詩『オデュッセイア』に登場するユリシイズを主人公とする話と何らかの系統関係が存在することが指摘されるようになったのである。

最初期の議論としては坪内逍遙による南蛮人によつてもたらされたとする説があるが〔坪内 一九七七〕<sup>6)</sup>、南蛮人の渡来に先立つ当該伝説の記述が『雲玉和歌抄』(二五一四年刊行)という資料に見られるため、現在は更に古い時代に遡つて、この伝説がもたらされたと考えられている〔坂井 二〇一六 四四〕。『オデュッセイア』と『雲玉和歌抄』の間には、ギリシャと日本という空間的距離もさることながら、書かれた年代に二千年以上の時間的な隔たりが存在する。この長大な時間の中で、教えきれない人間の口と手を経て百合若大臣は日本に定着するに至つたと考えるだろう。

「地獄の人参」についても、ヨーロッパに類似するモチも。ヴィリリオの議論は、ドゥルーズ／ガタリの戦争機械論にも影響を与えたが、このような関心を持つヴィリリオの研究は、必然的に近年、電腦空間を対象とするようになった。『ネガティブ・ホライズン―速度と知覚の変容』(一九八四)、『瞬間の君臨―リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』(一九九〇)、『情報エネルギー化社会―現実空間の解体と速度が作り出す空間』(一九九三)、『電腦世界―最悪のシナリオへの対応』(一九九六)といった先駆的な著作を立て続けに発表しているが、筆者の問題意識と関わるヴィリリオの発言を、ここでは『電腦世界』から引いておきたい。

新しいテクノロジとは、サイバネティックスのテクノロジのことです。情報の新しいテクノロジは、諸関係や情報をネットワーク化するテクノロジです。……こうしたテクノロジは、もちろん統一された人類の展望をもたらすのですが、同時に画一化された人類の見取り図をもたらすことにもなります。……新しいテクノロジによるリアル・タイムの利用は、人が望むと望まないにかかわらず、歴史的時間と関係のない時間の利用、つまり世界時間の利用を意味します。リアル・タイムとは世界時間のことなのです。ところであらゆる歴史は、ローカル時間で形成されてきました〔ヴィリリオ

ーフの民話が存在することから、近代以前に日本で伝承されてきた可能性も否定できない〕<sup>7)</sup>。しかし恐らくは、「因果の小事」を読んだ僧侶による説法や、教科書に採択された「蜘蛛の糸」を読んだ人々の口を経て広がりを見せたものであると考えられる。

百合若大臣の伝説と「地獄の人参」を比較するときに重要なのは、それぞれの話のヴァリアントの間にある時間と空間の距離の問題である。両者に共通しているのは、海を越えてもたらされた点であるが、異なるのはその間に存在する時間的な隔たりだろう。仮に「地獄の人参」がドストエフスキーやケールラスに起源を持つとすれば、わずかな時間で一気にそれが広がったと見なくてはならない。話の広がり「速度」という面では、明らかな違いが存在するのである。

### (2) 伝播の速度

本稿では、この「速度」を鍵概念としながら考察を進めていきたい。ここで参照しておきたいのが、思想家のポール・ヴィリリオが用いた速度概念である。

ヴィリリオが得意とするのは、モノや情報の移動速度の変化が、どのように戦争や都市、芸術、これらと関わる政治、そして人間の知覚に変容をもたらすのかを分析することであ

一九九八(一九九六)三一四〕。

ヴィリリオがここで述べているように、私たちの時間をめぐる体制は、ローカル時間から世界時間(リアルタイム)へと移行している。このことが、あらゆる知識、情報、文化現象の伝播に、どのような影響を与えているかは、民俗学の方法論をアップデートする上でも避けて通れない問題になってくるだろう。柳田国男以来の比較研究法は、伝承の分布の空間的距離が時間的距離を反映するものと仮定しており、その配列によつて伝承の経路や変遷を跡付けようとした〔柳田 一九九八a、一九九八b〕。しかし様々な文化現象が同時多発的に地球規模で発生する現代においては、研究対象によつて異なる分析視角が必要になってくる<sup>8)</sup>。本稿で「虹の橋」を取り上げるのは、そのような研究対象として好個の事例と考えられるためである。

### 3. 「虹の橋」について

#### (1) 「虹の橋」の概要

「虹の橋」とはペットが亡くなった際に、動物たちが向かうとされる他界の定型的なモチーフで、現在はツイッターやフェイスブックといったSNS上で、比較的容易にこれと関わる語りを見つけることが出来る。その概要については、前

稿の冒頭でも紹介したが、改めてその内容を見ておきたい。

この世を去ったペットたちは、天国の手前の緑の草原に行く。食べ物も水も用意された暖かい場所、老いや病気から回復した元気な体で仲間と楽しく遊び回る。しかしたった一つ気がかりなのが、残してきた大好きな飼い主のことである。

一匹のペットの目に、草原に向かってくる人影が映る。懐かしいその姿を認めるなり、そのペットは喜びにうち震え、仲間から離れて全力で駆けていきその人に飛びついて顔中にキスをする。死んでしまった飼い主「あなたは、こうしてペットと再会し、一緒に虹の橋を渡っていく。」<sup>(10)</sup>

この話の出版については諸説あるが、現在確認できる最も古い出版物は、アメリカのポール・C・ダムが一九九八年に発表した*The Rainbow Bridge* という著作である〔Dalim 1998〕。ダムは一九八一年に、この話のもとになる詩を創作したと主張しているが、重要なのはダムがグリーンフカウンセラーを生業としている点だろう。グリーンフとは深い悲しみや、悲嘆、苦悩を表す言葉で、身近な家族や友人の死による大きな喪失に伴って生じるとされる。アメリカではこうしたグリーンフケア、スピリチュアルケア

の専門家が活動しており<sup>(11)</sup>、このような文化的、社会的背景が「虹の橋」の発生と深く関わっている点には注意すべきである。

ペットの死に傷ついた人々をケアするために、「虹の橋」が心の専門家の手によって作られた蓋然性は高いが、一九八〇年代にはインターネットも普及しておらず、「虹の橋」も局地的に受容される話に過ぎなかったと考えられる。世界的規模で「虹の橋」が伝播していくのは、インターネットの普及と軌を同じくするのである。

## (2) インターネットにみる「虹の橋」

インターネットにおける「虹の橋」の初出は、一九九三年八月七日にアン・コットンとM・ジェイコブスという人物の間で交わされたメールで、これは現在も閲覧可能である<sup>(12)</sup>。概要は愛犬二匹を失ったアン・コットンに対し、ジェイコブスが「虹の橋」を教えるというのだが、ジェイコブスは同年一月七日に*The Caniners* なる団体から送られてきたメールを引用しており、そこには、*Mid-Atlantic Great Dane Rescue League* というグレートデーン保護団体のニュースレターに「虹の橋」の話があったと記されている。またこの団体も*The Akita Rescue Society of America* という秋田犬保護団体から「虹の橋」を伝え聞い

たとしているが、こうした愛犬家達のメールやニュースレターを介して、「虹の橋」が徐々に広がりを見せていたことが理解されよう。しかしインターネットの普及率という問題もあり、まだこの時期には世界的規模で「虹の橋」が受容されるに至っていなかったと考えられる。

重要な転機が生じたのは、ブロードバンドが一般家庭に広く普及し始める二〇〇〇年代に入ってからであろう。二〇〇一年に発足した英語版 Wikipedia には、二〇〇五年三月一日に*Rainbow Bridge (pets)* の項目が登場する<sup>(13)</sup>。また二〇〇五年から二〇〇七年にかけて日本でも「虹の橋」を題材とした絵本やエッセイ集が相次いで出版されているが〔イーグルパブリッシング編集部編 二〇〇五、湯川二〇〇六、葉 二〇〇七〕、芝山弓子（仮名）という人物が創作したとされる「虹の橋」の「第三部 雨降り地区」の登場（二〇〇五年）などは、当時の「虹の橋」の受容状況を窺い知る上で興味深い。

「虹の橋」には、前節で紹介した話だけでなく、続編の第二部と第三部が存在する。第二部の *At the Rainbow Bridge* (虹の橋にて) は、生前に飼い主がいなかった動物とペットを飼ったことのない人間が虹の橋で結ばれるという内容である<sup>(14)</sup>。もともと英語で書かれたものであり、作者不詳だが、この話もインターネットによって伝播したものと考えられる。

第三部の「雨降り地区」は、残された飼い主の涙が虹の橋の雨降り地区という場所に降り注いでおり、その雨に打たれたペットは残された飼い主を思って悲しんでいるという内容である。だからこそ飼い主は悲しみを乗り越え、ペットと再会できる時を信じて生きねばならないとこの話は結ばれるが、これは日本語で書かれたものであるため、日本国内のみ流通する話だと考えられる。しかし、近年では隣国の韓国にも「虹の橋」が広がりを見せているため、他国における第三部の受容も、今後は注視する必要があるだろう。

Wikipedia の「虹の橋」の項目は、日本語、チェコ語、ロシア語が二〇〇八年に相次いで立項されており、韓国語は二〇一七年に書かれている。しかし管見の限り、二〇〇八年三月に英語を韓国語訳した例が存在するため<sup>(15)</sup>、この年、同時多発的に世界中のネット空間で「虹の橋」が表面化しはじめたと見ることができよう。なお Wikipedia に中国語の項目は存在しないが、二〇〇七年に翻訳された例が存在する<sup>(16)</sup>。また二〇一七年には台湾で「虹の橋」(中国語: 彩虹橋) というタイトルのペトロロスになった読者向けの著作も出版されたようである〔寶 二〇一七〕。

このように世界中のペット愛好家達に受け入れられている「虹の橋」であるが、SNS 上では、「うちの〇〇が虹の橋に旅立ちました」、「××ちゃんが今日、虹の橋を渡



りました」などと、その死を表現する定型句として用いられる場合が多い。虹の橋のたもとで飼い主がやってくるのを仲間たちと待っており、その後、飼い主と共に橋を渡るという本来の話からすると矛盾があるが、これはペットが死んだことを直接的に表現するのを避けるための、一種の言い回しであると考えられよう。最近では、自分の親族が亡くなった際にも「父が虹の橋を渡った」などと表現をする例が確認されているが、民俗学的には、瀬戸内海沿岸地域で死者が出た際に用いられる「ヒロシマに行く」、「ヒロシマに煙草（茶）を買いに行く」といった死を婉曲に表現する忌み言葉が想起される<sup>(18)</sup>。「虹の橋」の広がりには、そのような心性が背後にある可能性も想定されるのである。

### (3) ペット供養と「虹の橋」

先行研究で「虹の橋」に言及しているものは、現代的な民俗信仰として近年、注目を集めているペット供養、ペットセメタリーについて論じたものである。日本の「虹の橋」に触れているものとして、『Ambros 2012』内藤 二〇一三）などがあるが、これらより一足早く、S・ブランドスが『The Meaning of American Pet Cemetery Gravesites』という論文で、アメリカの「虹の橋」を取り上げている (Brandes 2009)。ブランドスは、アメリカのペットをめぐるスピリチュア

ルな信仰が如実に表れている例として「虹の橋」を位置付けており、マンハッタン動物病院のグリーンフサポートグループで実施したフィールドワークでは、ペットを亡くした多くの人々が、この信仰を何らかの形で有していたと指摘している [Ibid.:11]。

ペット供養については日本民俗学の蓄積も厚く、「松崎二〇〇四、中野 二〇〇九」などの研究が挙げられるが、ペットの「家族化」が、これにどのような影響を及ぼしたのかといった観点からの議論がなされている。現代社会におけるペット供養で、まず目を引くのは寺院や民間業者による様々なサービスであるが、「虹の橋」は、こうしたペット供養のあり方にも影響を及ぼしはじめていたのである。

例えばアメリカでは、亡くなったペットの名前や生没年を刻んだ墓石を販売している Rainbow Bridge Pet Memorials という会社のサイトが存在し、この会社が一九九六年から存在することが明記されている<sup>(20)</sup>。また通販サイトのアマゾンでは、英語の「虹の橋」が書かれたフォトフレームが販売されており好評を博しているが、これはペットの遺影を飾るために用いられていると考えてはば間違いないだろう<sup>(21)</sup>。

翻って日本の場合はどうであろうか。近年ではペット葬を行う業者がWEBサイト上に「虹の橋」を掲載してお

り、会社名としてこれを用いる例も増えはじめている<sup>(22)</sup>。寺院でも動物供養塔に「虹の橋」と刻まれる例が現れるなど (群馬県板倉町実相寺)<sup>(23)</sup>、その影響は既成宗教の枠を超えて広がりを見せており、最近、売り上げを伸ばしているペット供養向け仏具や線香にも「虹の橋セット」、「虹の橋のたもと」といった商品名を持つものが存在する。「虹の橋」が電脳世界だけでなく、現実世界にも影響を与えはじめていることが理解されよう。

## 4. 考察

本稿の第一章で述べたように、文字を介した話の伝播を三つの画期に分けて考えた場合、「虹の橋」は第三の画期を経た後の典型的な事例だと言えよう。本章では、このような事例が生じる社会的背景について考えながら、民俗学としてどのような課題が存在するのかを論じていきたい。

第二章で引用したヴィリリオの発言に倣えば、私たちの時間をめぐる体制はローカル時間から世界時間へと移行している。その変化が空間のあり方とどのように関わるかという点については、以下のような議論が参考になるだろう。

テレヴィジョンとマルチ・メディアは、望遠レンズの写真が日常的な視野の地平をグチャグチャにするよ

うに、時間と空間のつながりやまとまりをグチャグチャにするのです。ですから、速度によって、世界が別な見えかたに変わり、公共空間というものは、写真、映画、テレビを通してひとつの公共的なイメージとなってきたのです (ヴィリリオ 一九九六 一六)。

ここでは、写真、映画、テレビが挙げられているが、インターネットは、これらのメディアを全て包含するものがあり、ここで言われている状況をさらに促進したと考えられる。ヴィリリオはヴァーチャルな公共空間が、「現実的な都市の喪失」をもたらしたと指摘しているが (前掲書 四九―五一)、この公共空間は「世間」とも親和性が高い概念であるように思える。仮に両者を近い存在として見た場合、ポスト都市民俗学のあり方を模索する上でも興味深い指摘だと言えよう。

ここで確認しておきたいのは、新たなテクノロジーによって生じた公共空間を、過去のそれと比べてみた場合、それは人々の知識や多様性を拡張するものだったのか否かという点である。再びヴィリリオの発言を見ておきたい。

輸送革命とともに、そして加速化が進行することに、より、間隔という概念がじよじよに消滅してしまった。

たとえば航空路では「空間的距離」という概念は「時間的距離」という概念にとつてかわられた。飛行機の前進の暴力によって運動の場としての空間が消滅し、時間だけが存続するようになった。しかしこの縮約・衝突はさらにつづき、飛行機の推進力がまずにつれ飛行の道のりの線の長さが短縮される。そして近い将来にはきつと到着しか、到着点しか存在しなくなるだろう：AVコミュニケーションの場では事態はすでにそうなっている（ヴイリリオ 二〇〇三（一九八四）一五〇）。

ここで言われているように速度が増すことによつて、「間隔」という概念はじよじよに消滅し、最終的には点的なものへと変化する。このような加速に伴う空間の変質は、公共空間のあり方にも影響を及ぼしたと考えられるだろう。すなわち過去の公共空間と比較した場合、私たちのそれは画一・縮小化が進んでいる可能性があるのである。現在の「世間話」が、この仮説を裏付けるか否かは、更なる事例の収集と分析を要するが、少なくとも「虹の橋」は、世界規模で同じ話が、ほぼ同時に受容されたという意味において、ここで言われている議論を傍証するものとなっている。

過去の民俗学・人類学における伝播主義は、ある文化現

字による話の伝播を三つの画期に分けて見ていくことを提案し、前稿で取り上げた「地獄の人参」を第二の画期に特徴的なものとして位置づけ、「虹の橋」を第三の画期を経た後の事例としながら分析を行った。第三章では、「虹の橋」の詳細を具体的に見ていったが、これが二〇〇〇年代に入って、ほぼ同時に世界的な広がりを見せはじめ、現在もそれが進行中であることを確認した。また近年では、ベトナム供養、ベットセメタリーの一般化に伴い、この話が人々に受容されていることも見ていった。

第四章では、ポール・ヴイリリオの速度の増大に伴う公共空間の画一・縮小化という議論を敷衍させ、話の伝播が面から線へ、そして点的なものへと変化している可能性を指摘した。こうした伝播の様相の劇的な変化に対応する理論的枠組みを提示していくことが、今後の民俗学において重要性を持つと考えられるが、あわせてヴイリリオが言う公共空間と「世間」の関係についても議論を深めていく必要があるだろう。

現代的な話の存在様式について考える際には、他国、他言語におけるそれがどのような状況にあるのかを提示することも、本論で浮上した様々な問題にアプローチする上で有効だと思われる。<sup>(23)</sup> こうした国際比較の視野と理論的課題を意識しながら、今後も事例の収集と分析を進めていきたい。

象が地理的空間において徐々に変化しながらも面的に拡がっていくと想定したが、面の内部には連続性を持ったヴァリアントが存在する。しかし「地獄の人参」のような外来昔話は、原典と生活世界の語りがダイレクトにつながっており、その間に存在する地理的空間にヴァリアントは生じない。そのような意味で外来昔話は線的な存在だと言えよう。そして「虹の橋」のような電脳世界を介した話の伝播は、世界規模で同じ話が同時に広がるという意味で点的であると言うことができる。

ここでは先述の三つの画期に対応させる形で口承文芸の分布を面、線、点という比喩を用いて説明したが、これも公共空間（世間？）の画一・縮小化という仮説に基づいたものである。これについては批判的な観点からも反証を集め、議論を積み重ねる必要があるが、少なくとも、今後の民俗学の伝播に関する議論のなかで、従来とは異なるモデルを用意することが喫緊の課題であることは、異論の余地が無いだろう。

#### おわりに

以上、本稿では近年インターネット上で広がりを見せている「虹の橋」を取り上げ、これが過去の話の伝播とどのように異なるのかを議論した。その際の分析視角として文

#### 注

- (1) このような昔話のことを大島廣志は「外来昔話」と呼んでいる（大島 二〇〇七）。
- (2) 筆者は明治期に高木敏雄などによって行われた新聞紙上における昔話や伝説の収集、掲載も各地の新たな昔話、伝説の形成に影響力を持ったのではないかと考えている。印刷技術の登場以前と以後の書承の質的な違いについては、伊藤龍平も指摘している（伊藤 二〇一六 八一）。
- (3) 伊藤龍平は、インターネット上で流通する話の場を倉石忠彦の「伝承体」の語に倣って「電承体」と呼んでいる。電承体には電承説話の「送り手」が存在するが、個性豊かな口承の場における「語り手」と異なり、彼らは無色透明な存在であるとされる。詳しくは（伊藤 二〇一六 五八―六一）を参照のこと。
- (4) サイバネティクスとは、ノーバート・ウィーナーが第二次世界大戦後に提唱した学問分野である。生物、機械等の通信・制御機構を区別せず（両者の間には類似性が存在する）、様々な学問分野を統合することで、それを分析、応用することを目指した（ウィーナー 二〇一一）。その成果は現在の人工知能、通信技術、機械工学の発展に多大な影響をもたらしたが、私たちの言語と身体は、それらの技術と密接に結びついているという意味におい

て、すでに機械化されていると言うことも可能である。

伝承がどのような関係にあるのかを分析する視点は、本稿の問題意識と重なる部分が大い。

(10) ウイキペディア「虹の橋(詩)」の項目より引用。

(6) 南方熊楠は高木敏雄宛ての書簡においてこの議論に触れており(明治四五年四月二三日)、アブレイウスの『黄金の驢馬』に収録されているアシューケーの難題に関する話が、小栗判官と照手姫の伝説と類似していると指摘している。

(11) 日本においては、二〇〇五年に発生したJR福知山線の脱線事故による被害者遺族のケアを目的としたグリーンフケア研究所が、聖トマス大学に設置されたのが専門家要請機関として初の事例とされる。同研究所は、聖トマス大学の学生募集の停止に伴い上智大学に継承され活動を続けている。

(7) このヨーロッパの民話も仏典に起源を持つ可能性がある。しかし「一本の葱」や「地獄の人参」、「蜘蛛の糸」の内容と類似する仏教説話は管見の限り見つかっていない。

(12) "Rainbow Bridge (Was: Pets passing away." 参照。  
https://groups.google.com/forum/?hl=en#topic/rec.pets.dogs/KW-Rgq\_IOKA (二〇一八年二月二十八日確認)

(8) 戦争機械は、超越的な構造やシステムティックなメジャーサイエンスと異なり、ネットワーク上の相互作用に基づく概念だとされる。それは国家のような存在の形成を妨げる作用をもつとされた。ドゥルーズ／ガタリはこの着想をビエル・クラストルの『国家に抗する社会』から得ている。「千のプラトール(下)」における「二二二七年―遊牧論、あるいは戦争機械」を参照のこと  
[ドゥルーズ／ガタリ 二〇一〇]。

(13) 以下の各言語における初出情報は、Wikipediaの「虹の橋」の項目における編集履歴による。URLは前掲注(10)を参照のこと。

(14) ペット・トライアングルWEBサイトの「虹の橋」第二部「虹の橋」参照。  
https://pet-triangle.jp/rainbowbridge-2.html (二〇一八年二月二十八日確認)

(9) 鈴木正崇は広島県山間部の比婆荒神神楽を事例とし、文化財指定に伴う文字資料化や映像記録化が、どのように当該地域の「伝承の持続」に影響を及ぼしたのかを考察している(鈴木 二〇一四)。こうした現代的な諸現象と

(15) Rainbow Bridge (무지개 다리) 参照。  
https://m.blog.naver.com/PostView.No=100048530593&proxy

Refer=https://3A%2F%2Farnheho.jp%2F (二〇一八年二月二十八日確認)

Bridge Poem の通販ページ参照。  
https://www.amazon.com/Bereavement-Photo-Frame-Rainbow-Bridge/dp/B0035M31XG (二〇一八年二月二十八日確認)

(16) Rainbow Bridge (彩虹橋) 参照。  
http://sincianatu.pixnet.net/blog/post/5392193-%E3%80%8C%E5%BD%A9%E8%99%B9%E6%A9%8B%E3%80%8D-%E7%B5%A6%E6%9B%BE%E7%B6%93%E5%A4%B1%E5%8F%BB%E5%AF%B6%E8%B2%9D%E7%9A%84%E4%BA%BA~ (二〇一八年二月二十八日確認)  
(17) Yahoo 知恵袋に二〇一三年二月に投稿された「虹の橋を渡る」という表現は、人間が亡くなった時にも使いますか?」といった質問などを参照のこと。  
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\_detail/q14117854909 (二〇一八年二月二十八日確認)

(22) 日本における遺影の扱われ方の変化については、[山田 二〇一]を参照されたい。ペットの遺影がどのような場面で登場し、いかなる意味を持つのかは、今後の研究課題である。

(23) 例えば「ペットセレモニーにじのはし」(茨城県筑西市)、「ペット葬儀にじの橋舎」(兵庫県神戸市)といった葬祭業者が近年、現れており、熊本県熊本市、広島県竹原市などにも同様のネーミングが行われた例が存在する。

(18) 「ピロシマへ行く」という言い回しの総括的な研究としては「小口 一九八五」を参照のこと。  
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\_detail/q14117854909 (二〇一八年二月二十八日確認)

(24) 真言宗豊山派実相寺ホームページ参照。http://www.jissoji.com/ (二〇一八年二月二十八日確認)

(19) [Ambros 2012] については近藤社秋氏から、「内藤 二〇一三」については及川祥平氏からそれぞれ「教示頂いた。」

(25) 三隅貴史は「ネットロア」の書評において、アメリカ民俗学における「デジタルフォークロア」の研究蓄積に言及しており、今後、日本民俗学においても、その参照が必要になるとの指摘を行っている[三隅 二〇一七]。

(20) Rainbow Bridge Pet Memorials 公式サイト参照。

参考文献

https://www.rainbowbridgepetmemorials.com/ (二〇一八年二月二十八日確認)

イーグルパブリッシング編集部編 二〇〇五 『虹の橋』で逢おうねー愛する動物たちとの再会の時に』イーグルパブリッシング

(21) Amazonにおける Pet Bereavement Photo Frame Rainbow

伊藤龍平 二〇一六 『ネットロアーウェブ時代の「ハナシ」

の伝承」青弓社

ウィーナー、ノーバート 二〇一一『サイバネティクス』岩波書店

ヴィリリオ、ポール 一九九八『電脳世界―最悪のシナリオへの対応』産業図書

二〇〇三『ネガティブ・ホライズン―速度と知覚の変容』産業図書

大島廣志 二〇〇七『民話―伝承の現実』三弥井書店

小口千明 一九八五『忌言葉「ヒロシマへ行く」にみる他界の

認識像とその変化』『歴史地理学紀要』二七

坂井弘紀 二〇一六『中央ユーラシアと日本の民話・伝承の比較研究のために』『表現学部紀要』一六

鈴木正崇 二〇一四『伝承を持統させるものとは何か―比婆

荒神神楽の場合』『国立歴史民俗博物館研究報告』一八六

坪内逍遙 一九七七（一九〇六）『百合若伝説の本源』『逍遙選

集』一一 第一書房

ドゥルーズ／ガタリ 二〇一〇『千のプラトー（下）』河出書

房新社

内藤理恵子 二〇一三『現代日本の葬送文化』岩田書院

中野紀和 二〇〇九『ベット供養にみる現代社会の一面』

『大東文化大学紀要 人文科学』四七

マクルーハン、マーシャル 一九八六『グーテンベルクの銀河

系―活字人間の形成』みずず書房

松崎憲三 二〇〇四『現代供養論考―ヒト・モノ・動植物の慰霊』慶友社

三隅貴史 二〇一七『書評 伊藤龍平著『ネットロア ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』』『日本民俗学』二九〇

柳田国男 一九九八（一九三三）『民間伝承論』『柳田国男全集』八 筑摩書房

柳田国男 一九九八（一九三五）『郷土生活の研究法』『柳田国男全集』八 筑摩書房

柳田国男 一九九八（一九四七）『口承文芸史考』『柳田国男全集』一六 筑摩書房

山田慎也 二〇一七『遺影と死者の人格―葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して』『国立歴史民俗博物館研究紀要』一六九

湯川れい子 二〇〇六『虹の橋』宙出版

葉祥明 二〇〇七『虹の橋―Rainbow Bridge』佼成出版社  
寶總監 二〇一七『彩虹橋―Rainbow Bridge』時報出版（台湾）

Ambros, B. 2012. *Bones of Contention: Animals and Religion in Contemporary Japan*. Hawaii: University of Hawaii Press.

Brandes, S. 2009. "The Meaning of American Pet Cemetery Grave stones." *Ethnology*, 48(2): 99-118

Dahn, P.C. 1998. *The Rainbow Bridge*. s.l.: Running Tide Press.

## 斎藤隆介の創作民話とルポルタージュの方法

間所 瑛史

はじめに

小学生の頃に国語の授業で「八郎」や「モチモチの木」という物語を読んだ人も多いのではないだろうか。教科書で読んだことはなくても図書館などで滝平二郎のノスタルジックな切り絵の絵本はどこかで見たことがあるだろう。斎藤隆介は戦後に「八郎」、「ペロ出しチョンマ」、「モチ

モチの木」など日本の昔話や伝説を素材とした児童文学作品を数多く発表し、小学校国語教科書に採録されたものもある。一方で斎藤は自らの仕事を「創作民話」として明らかにしている通り、同時代の政治運動や社会運動とも非常に近い存在であった。自身も木下順二らとともに第一次民話運動の中で活躍した益田勝実が斎藤に代表される創作民話を「民話が十分に語りえなかったものを、民話に対して

抗議している」試みである〔益田 一九七二：四〇〕と論じているが、創作民話を含めた斎藤の思想や実践が児童文学界を含めて顧みられていないとはいえない。

そうしたことを踏まえ本稿では斎藤隆介のルポルタージュや書き残した文章をもとに斎藤の思想を検討し、「二つの民話運動の時代」を生きながらも、民話運動とは異なった方法で自身の思想を表明していった斎藤隆介の思想を描き出していきたい。

### 一 斎藤隆介と民話の時代

本稿を始めるにあたってまず斎藤隆介の経歴を確認したい。<sup>(1)</sup> 斎藤は一九一七年に東京府豊多摩郡渋谷町に生まれ、本名を隆勝という。一九三三年に早稲田大学付属早稲田第一高等学院に入学し、この頃から佐井東隆の名で毎日



# 世間話研究

第 26 号

鄭清文「紅亀裸」の幽霊たち——童話と世間話——…………… 伊藤 龍平 1

虹の橋と地獄の人参 —その発生と伝播をめぐる考察 (二) —  
…………… 加藤 秀雄 18

斎藤隆介の創作民話とルポルタージュの方法 …………… 間所 瑛史 31

【資料報告】

栃木市岩舟の世間話 …………… 永島 大輝 47

雑誌『世界の秘境シリーズ』記事目録 (I) —創刊～第三〇集—  
…………… 大道 晴香 62

■世間話研究会例会記録 …………… 82

世間話研究会

2018年7月

世間話研究 第二十六号

世間話研究会